

◆ 劇団こむし・こむさの上演記録

- 第1回公演 2014年10月28日
「右から三つ目のベンチ」
日暮里d-倉庫
- 第2回公演 2015年11月10日
「たった二軒の回覧板」
日暮里d-倉庫
- 第3回公演 2016年11月1日・2日
「啄木の蒼き影法師」
日暮里d-倉庫
- 第4回公演 2017年11月21日
「水の中の塔-東京スカイツリー異聞」
両国シアターX
- 第5回公演 2019年1月19日
「降りる人-時代」
両国シアターX
- 第6回公演 2019年12月7日
「トラック島のヘル」
両国シアターX
- 2020年10月13日
「よそのくに」
コロナ禍のため上演中止
- 第7回公演 2021年9月22日・23日
「人魂でゆく気散じや」
両国シアターX



シアターXカイ提携公演
劇団こむし・こむさ
第8回公演

作・演出 野村 勇

第33回テアトロ新人戯曲賞佳作

よそのくに

田中実さんについて

1949年、神戸市東灘区に生まれる。
2歳の時に両親が離婚、児童養護施設・双葉学園に預けられた。
神戸工業高校を卒業後、いくつかの職場を経て、金田龍光さんが働くラーメン店の従業員に。
1978年6月、田中実さん(当時28歳)はラーメン店の店主と共に、成田空港からウイーン行き飛行機に搭乗。以後、消息不明となる。

金田龍光さんについて

田中さんと同じく双葉学園で育つ。
3つ違いだったため、金田さんの中学卒業と、田中さんの高校卒業が重なり、二人は同じ時期に養護施設を巣立った。
ホットドッグの移動販売、のちにラーメン店の従業員として働き、田中さんを店に誘った。
田中さんが失踪して半年後、国際郵便が届く。差出人の欄には、「田中実」とあった。



2022年11月2日(水)

14:00 18:30

劇団の連絡先 nomura1949 @ gmail.com
劇団のホームページ 劇団こむし・こむさの部屋
<http://www.ichikiyo.com/komushi.htm>
劇団代表・野村勇のブログ こむし・こむさの日々
<http://komushikomusa.jugem.jp/>

劇場 東京・両国 シアターXカイ

作・演出より

野村 勇

“客席に座る人も創造者”

本日は劇場まで足をお運びくださいまして、ありがとうございます。

私どもがここ、シアターXにてお芝居を上演するのも、今回で5回目となりました。

シアターXが出されている資料に、つぎのような言葉が載っています。

“劇場は、「舞台芸術を創造する場」です。私たち(=シアターX)は、俳優や創造現場に関わる人は勿論のこと、客席に座る人も創造者と考えています。”

本日、皆様と共に、一つの作品を創造することができましたら、こんな喜びはありません。

なぜ田中さん・金田さんの物語を？

『よそのくに』は、16人目の拉致被害者として認定されている田中実さんと、「拉致の可能性を排除できない」とされている金田龍光さんのお二人をモデルに、不明な部分は想像も加えて創作した作品です。

「どうして田中さんと金田さんの問題を取り上げたのか？」……というご質問を何度か受けることがありましたので、その辺について、書かせていただきます。

「新潟少女監禁事件」という事件がありました。1990年の11月、新潟県三条市の路上で、9歳の少女が28歳の男に誘拐され、監禁された事件です。監禁は、少女が2000年1月に発見されて保護されるまで、9年2か月に及びました。

2014年の3月には、埼玉県朝霞市の中学1年の女子生徒が、下校途中に誘拐される事件が発生しました。犯人は大学生で、自宅アパートに2年余り女子生徒を監禁し続けました。

このような事件の被害者の心中を想像すると、人が生きる、その場所を選べるということが、人の自由にとってどんなに大切なことか、肌で感じさせられます。

上の誘拐監禁事件は、個人による非道な行為ですが、もしこんな行為が、国の意志でおこなわれたとしたら？ しかもそれが、他国の意志によっておこなわれたとしたら？

いや、「もし」ではなく、それは実際におこなわれ、今もおこなわれつづけているのです。

2018年の3月、ロンドンのナショナル・シアターで、横田めぐみさんとみられる女性を主人公にした芝居が上演されました。脚本を書いたのはイギリス人の脚本家、フランシス・ターナー氏で、氏は日本人の母親や親戚から拉

致問題についての話を聞き、戯曲を書くことを思いついたそうです。

私はこのことを新聞の小さな記事で知り、あるショックのようなものを身に感じました。

母親が日本人とはいっても、北アイルランド出身のイギリス人が、拉致問題をテーマにした戯曲を書き、ロンドンで上演した……、その事実に強い衝撃を受けたのです。イギリス人が、日本語混じりの英語で書いた戯曲を、アジア系の俳優が演じるのであれば、この日本で、当事者である私たちが演劇化に取り組むべきではないだろうか、そう考えたのです。

そうして、拉致問題に関する書籍や資料を集め、調べる中で、出会ったのが田中実さんと金田龍光さんの事例でした。

とりわけ、戯曲執筆の強い動機になったのは、田中実さんがこの世に生を受けたのが、1949年だったということです。田中実さんと私は、戦後間もない頃に生まれた、同学年の人間ということになります。

1978年、28歳で拉致されて、以来40年以上も帰国を果たせないでいる、田中実さんの人生。それは、もしかしたら、私の人生であったのかもしれない。そんな思いで執筆したのが『よそのくに』でした。

『よそのくに』は、2020年10月13日にシアターXで上演する予定でございました。

しかし、コロナ禍のために公演を中止せざるを得ませんでした。

上演は叶いませんでしたが、戯曲『よそのくに』は、第33回テアトロ新人戯曲賞の佳作に選んでいただけました。そうして2年後の本日、多くの方々のご協力によって、上演が実現しようとしております。

<付記>

○ 劇中では、田中実さんのお名前を田代充さん、金田龍光さんのお名前を張本龍男さんとしています。そのほかの固有名詞についても、変更をしています。

かの国でおこなわれている自己批判・相互批判の場についても、一般に「生活総和」とされているようですが、意味が伝わりにくいと考へまして、劇中では「生活総括」と言い換えております。

○ 出来る限り、事件に関する資料にあたりましたが、不明な点や謎の部分が多くあります。公にされていないこともあるようです。

また、演劇化するにあたって、事実と異なる工夫をしている箇所もございます。けして、ノンフィクションの作品ではないことを、ご理解くださいますようお願いいたします。

キャスト

田代 充
田代しずゑ (田代充の妻)
張本龍男
渡里加寿子(養護施設の元保母)
ラーメン店主の元妻
金 (北朝鮮の指導員、のちに課長)

市川 清文
青木 一代
中島 康太郎
今野 好江
荘司 あや子
野村 勇



スタッフ

作・演出 野村 勇
音響 市来 邦比古
照明 安達 直美
舞台監督 田中 新一 (東京メザマシ団)
音響操作 荒木 まや
装置 野村 勇
小道具 高津装飾美術 (株) 出崎 健太

*

協力 飯島 正明
松本 藍果
鈴木 純子
佐田 マサ子
安久津 薫
荘司 岳志
荘司 硫斗
シアターXのスタッフの方々
ありがとうございました。(敬称略)

また、公演情報の公開後、北朝鮮による拉致・人権問題にとりくむ法律家の会 特定失踪者問題調査会の方々にもご教示・ご配慮を賜りました。感謝申し上げます。

◆音響家(市来 邦比古)の紹介

1970年代、小劇場演劇の黎明期にフリーの音響家としてさまざまな劇団・演出家と共同作業をおこない、1976年、劇団第七病棟創立に参加。1969年から現在まで、プランナーとしてクレジットされた作品は500作品以上。世田谷パブリックシアターをはじめとして、まつもと市民芸術館、札幌芸術劇場など、多くの音響設備の設計に関わってきた。大学や業界団体での講座を通じて後進の指導に当たる。

最近の作品としては、「スカパン」(潤色・演出・美術 串田和美) などがあり、11月には二兎社「歌わせたい男たち」(作・演出 永井愛) が上演される。

